

にとつても、畜産農家にとつても、これまで以上に重要になってきています。このような現状を踏まえながら、日本でも有数の水田地帯である庄内平野を中心として、耕種農家と畜産農家の連携を強化し、日本の水田農業や畜産経営の維持・発展に向け、様々な角度から考えていきたいと思っています。また、教育活動や大学附属農場の運営等の仕事は、初めての経験ですが、学部での学問としての農業に加え、学生さんには、実践的な農業技術を習得できる場を提供していきたいと思っていますので、みな様のご指導・鞭撻をお願い申し上げます。



ご挨拶

食料生命環境学科
森林科学コース
准教授 林 雅秀

2015年7月に山形大学農学部森林科学コース、林政

学分野の教員として採用していただきました。林雅秀と申します。鶴岡に来る前までの約14年間は森林総合研究所に勤め、森林所有者の行動や共有林管理の問題について社会科学系の研究に従事していました。これまでの私の研究の中心的な関心を一言でいえば、森林の利用や管理、あるいはそのための社会や集団における社会関係の役割を明らかにすることでした。私はインタビューも質問紙も資料(史料)も使う節操なしですが、ある社会の社会関係を知るためにはその社会にそれなりに深く入り込む必要があると思っています。この原稿を書いている時点で鶴岡に来て3ヶ月が過ぎ、その間は、前の職場でやり残してきた研究の整理とまだ慣れない講義の準備で時間が過ぎてしまいました。伝統的な社会関係が現在でも機能しているように見えるこの庄内の地域社会に入り込み、近いうちにきちんと社会関係を調べられるようになりたいと願っています。最後になりましたが、これからどうぞよろしくお願い申し上げます。

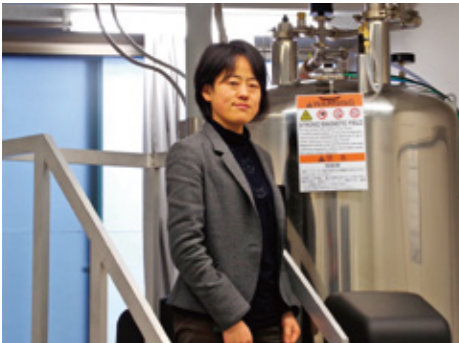
着任の挨拶

食料生命環境学科
植物機能開発学コース

助教 網干 貴子

平成26年9月より植物機能開発学コース生物有機化学分野に助教として着任しました。鶴岡で生活するのは初めてですが、実家の新潟から近く、赴任前から親しみを感じていました。昨年体験した初めての鶴岡の冬は予想以上の寒さでしたが、冬の寒さが育んだ新鮮な魚介や野菜を堪能することができ、充実した毎日を通り越して頂いています。

私は、京都大学農学研究科の化学生態学研究室で植物の昆虫の相互作用の研究をしてきました。植物と植食性昆虫は「食べられる食べられる」の関係にあり、植物は昆虫に食べられないよう、葉



を硬くしたり、苦味や毒性のある化学成分を蓄積したりと様々な防御機構を発達させています。植物の中にはイモムシに食べられるときにだけ特別な香りを全身から出して、天敵の寄生蜂を誘引するものもあります。「食べる」側の昆虫も、植物の防御機構を克服するため様々な工夫を凝らし、適応するための進化をしています。私の研究は、このような植物と昆虫の攻防を化学的に明らかにすることです。

近年、資源枯渇への危機感から、限りある資源を効率的に利用する持続可能な社会の実現が求められています。現在、私たちの社会では食糧の生産性を上げるために化学肥料や化学農薬を大量使用していますが、化学肥料・農薬も限りある資源です。いつまでも現在の生産方法が続けられるとは限りません。しかしながら、現状で農業や化学肥料の使用を停止したら、大幅に食糧生産が減少すると考えられています。そこで、私は植物が本来もつ防御機構を利用した植物保護や害虫管理の手法を模索することで、安定した食料生産を維持しながら化学農薬の低減を目指しています。その一方で、昆虫を防除対象としてみるだけでなく、植物の防御機構にシナやかに適応して生き延びてきた能力に注目し、ユニークな酵素や遺伝子を見つけ出すことで、ものづく

野菜をおいしく

サラダ感覚の漬物で手軽に野菜を

マルハチ 山形県東田川郡庄内町世六木字五反田75-1
TEL 0234-43-3331
https://maruhachi.n-da.jp/

代表取締役 阿部敏明 (昭和50年農芸化学科卒)



退職に寄せて

鶴岡での15年

食料生命環境学科
安全農産物生産学コース
教授 夏賀 元康

私は2001年2月16日に山形大学農学部助教として赴任しました。50歳での赴任でした。新人研修で、ずいぶんお年を召されている方がいらつしゃいますね、と挨拶されたのを覚えています。爾来15年、2016年3月31日で定年退職を迎えます。教職員、学生、OB・OGなど、多くの方に支えられた、あつという間の15年、というのが正直な感想です。大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

この15年は2003年の大学の法人化、2009年の農学部の学科改組と、大学と学部が大

きく揺れた期間でしたが、最後の1年は大学全体の組織改編に伴う農学研究科の定員削減、小白川3学部とのコース再編などで再び大きく揺れています。この激動期に1年間だけ学部長を仰せつかり、難しい舵取りに日々頭を悩ませていました。

私は1973年に北海道大学を卒業し、静岡県の中堅企業に就職しました。米麦用乾燥機の開発設計が仕事でした。紆余曲折はあったものの28年間、同じ民間企業に勤務していました。後半の15年はサラリーマンと研究者の二足のわらじを履いていました。この後半の15年で現在専門としている近赤外分光法の基礎と応用を勉強しました。振り返ってみると、15年ごとに仕事を覚えてきたことになりました。

私の所属は安全農産物生産学コースの生産機械システム工学分野で、赤瀬教授が2008年3月に定年退職されるまで二人で運営していました。その後は教授に昇任したものの一人で研究室の運営をしなければなりませんでしたが、幸いに2009年10月に秋田県農業試験場から片平光彦さんを准教授として迎えることができ、それ以来二人体制で運営しています。学生数も次第に増え、博士課程2名、修士課程5名、学部4年生7名、3年生4名、中国からの短期留学生1名の19名になり、学生

〒052-0022 北海道伊達市梅本町4番地65

株式会社 富士ビルサービス
代表取締役社長 伊達 紀夫

業務内容 ビルメンテナンス業・警備業(施設・交通)・ボイラー保守運転管理

TEL 0142-82-3560 FAX 0142-82-3561

E-mail fuji-building@future.ocn.ne.jp

経歴 北海道糖業(株) 職歴40年 (株)富士ビルサービス 現職在任20年

〒052-0012 北海道伊達市松ヶ枝町154番地20

社会福祉法人 泰生会
理事 伊達 紀夫
副代表

ケアハウス 伊達ふらいむ館 (収容人員 50名)

グループホーム 認知症対応型 共同生活介護 こもれば (収容人員 18名)

TEL 0142-21-5522 FAX 0142-22-3310



開設 平成12年9月

(昭和32年農学科卒業)

鶴岡旅館 月山荘 会議・会食・宿泊に

庄内地方の自然の恵みをご用意して皆様のお越しをお待ち申し上げます。

〒997-0032 山形県鶴岡市上畑町10-77
http://www.2jan.ne.jp/~gassanso/
電話 (0235) 23-1125

《特集》農場・演習林の今昔

「実験実習カリキュラム」のこと

東日本大震災復旧振興支援みやぎ県民センター代表世話人

仙台市在住

元農場長 網島 不二雄

「研究所」から赴任した私は、「学部農場」に興味津々でした。個別豊かな技官の存在はとくに印象深いものでした。

一日の作業が終わり、農場の日の活気とは異なる静かな雰囲気があった。うそれからの2〜3時間は、私にとってゆつたりとした気分での時間でした。

しばらくして、当直の技官が研究室に来てあれこれ話し込むことも増えました。その中で、農場にかける思い、日々の努力が学部教育には、充分生かされていないと感じるようになりまし

た。あれこれ考えました。そこで、従来までの「農場実習」と学部の「実験演習」を一体化してはと考える

ました。作物の生育ステージに合わせて、学部、農場が一体となった新しいカリキュラム「実験実習カリキュラム」です。圃場を利用する分野が農場と共同で、年度当初から「研究目標と圃場重点作業」を作成し、重点部分で実習を体得しようとするものです。その結果作物の成

育過程で起こる様々な事象（土壌条件、施肥、発芽、初期成育、病害、防除、等々の諸現象）の実際と意義を学生は体得できる、また教員は学んでほしい点を現場で指導できると考えたからです。

学部の若手教員の賛成も得て、早速、実験実習カリキュラム委員会を作り、とくに農学(当時)の3年生の午後の時間を全て実験・実習にあてるカリキュラムを作り、かつ年間、月間週間のプログラムを作り、カリキュラムの進行に努めました。学部では、それまで余り興味を持って選択する学生の少なかった研究室にも希望者が増えるといった思わぬ効果も出、技官の志気も高まりました。早いものでもう27年も前のことになってしまいました。

この実験実習は、当時の文部省の農学部再編計画の中で、山大構想の一つの目玉になりましたし、東大農場でもこのカリキュラムに注目するようになったといった成果にもなりました。

目下の苦しい大学運営の中で、学科再編がくり返されたり、大変な時期ですが、せつかくの知的財産です。新しいカリキュラムの中でも考慮の片隅に置いてもらえれば幸いです。



地元で根ざした山大農場へ

山形大学農学部
附属やまがたフィールド
科学センター エコ農業部門

現農場技術職員 本間 英治

昭和50年に高冷地砂丘地・本農場の三農場を高坂へ統合移転して約40年が経ちます。その当時を知る職員は現在残っていませんが、建物の多くは当時のまま使用しています。すなわち老朽化が進んでいるということですが、同窓生の方には懐かしさを感じていただけるかもしれません。外観はあまり変化していませんが、中身はだいぶ変わっているの、一部ですが紹介いたします。

圃場関係では、砂利が多く水持ちが悪い水田の一部(411a)を圃場整備し、不透水層と暗渠排水を完備した高機能水田に整備しました。果樹園でも土壌条件の悪い圃場約222aを暗渠排水完備の圃場へ整備中です。畜産関係では、乳牛をやめ黒毛和種の繁

殖に特化した経営に変更し、農場のランドマークであるタワーサイロは現在敷料用のモミガラを収容しています。

事業内容では地域貢献と開放事業に力を入れています。小学生の親子で参加する「わんぱく農業クラブ」は鶴岡市と農学部と農場が共同開催しており、田植えから収穫や餅つき更には細工まで水稻の栽培を一貫して体験できます。また、幼児向けの「大学農場に行こう」は、秋に栗とりんごの収穫体験とポニーや山羊等の動物とのふれあいが体験できるため大人気の企画になっています。さらに、新米の季節には「山形大学農場フェスティバル」を開催しています。これは農場および庄内地域で生産した新米を中心に、地元農産物の美味しさを多くの地域住民の方々にPRすることを目的に開催しました。親子連れや米離れの若い若者にも楽しんで頂けるようなブースを多く取り入れ、炊き立ての新米を無料で提供し、地元の商店等が出店した屋台でおかずを購入し、アマチュアバンドの演奏を聴きながら食べていただく企画です。広い牧草地にステージを設置して行うため、月山と金峰山を背景に解放感抜群なイベントです。今年で4年目の開催になります。今年度の方にも秋の恒例行事として定着しつつあります。

大学を取り巻く環境が目まぐるしく変化していますが、教育・研究はもとより地域からの要望に応えながら、地域に根差した農場を目指して、今後も開放事業に取り組んで行く予定です。

農場の今

大滝 諒子

安全農産物生産学コース
果樹園芸学研究室 4年

私が鶴岡に来て、3回目の夏を迎えました。ジリジリと照りつける太陽と、ジメジメした空気のせいで、相変わらず過ごしていく日々が続いています。でも、私はそんな鶴岡の夏が嫌いではありません。なぜなら、鶴岡の農作物が一番輝いて見える季節だと思うからです。青々とした稲が風に吹かれてサワサワと揺れていたりと、冬には何もなかった畑にナスやエダメが所せましと並んでいたり、ハウスの中で真っ赤に色づいたトマトが見られたり、一気に農地が華やきます。私が通う山形大学農学部附属やまがたフィールド科学センター高坂農場でも、春から夏にかけて職員さんが毎日忙しいように作業する姿が見られるようになります。冬の静まりから覚めるように活気づきます。だから、うだるような暑さの中の作業でも、どこかうきうきとしてみんなで頑張ろうと思えます。

作業で汗を流した後に採れたての農作物を食べられることも、農場にいる醍醐味だと思います。暑い中汗をかきながら、自分たちが生産管理に携わった野菜や果物は格別です。中でも、2年次に食べた採れたてのトウモロコシと、3年次に食べた完熟トマトの味は忘れられません。それまで食べてきたものと比べ物にならないほど甘く、感動したことを覚



▲旧高冷地農場実習室(昭和45年頃) 高冷地農場は昭和25年6月開墾開始



▲写真は月山高原牧場、旧高冷地農場は写真の右側にあり、昨年まで採草地として活用があった



▲旧砂丘地農場(現在)から湯野浜温泉を望む



▲旧砂丘地農場(昭和23年頃)砂丘地農場は昭和22年5月開墾開始、昭和50年砂丘地農場、高冷地農場の運営は廃止された